文脈で読む「身上さとし」（4）

増野正兵衛：おさづけを戴くまで②

天理大学人間学部講師
深谷　耕治　*Koji Fukaya*

明治20年3月25日(陰暦3月1日)に、飯降伊蔵は本席に定まった。それからの「おさしづ」の主なテーマの一つは、おさづけを渡すことである。『教史点描〝おさしづの時代〟をたどる』には明治20年におさづけを渡された人々が一覧で掲載されており、それを見ると増野正兵衛は比較的早い明治20年5月14日に戴いていることが分かる。(1)

前回に引き続き、その流れの中で正兵衛が戴いた「おさしづ」を確認していこう。

5月14日のおよそ3週間前の明治20年4月24日5時半、正兵衛は自身の身上の障りから「おさしづ」を伺っている。ここでは「席というは綾錦」などと本席の立場についてふれられており、その上で、「ほんに席さしづは仕事場。何時にても、どういう事も早く」と本席の役割が果たせるよう急がれていることが読み取れる。

それからおよそ2週間後の5月10日には妻のいとが「裏向き通じ悪しき」について「おさしづ」を伺っている。そこでは「先々案じあるから、自由自在一寸身の内の所不足出来る」と諭されている。おそらく、おぢばに移り住むことについての「先案じ」ではないだろうか。

正兵衛も2日後の5月12日「足だるみ」「胸痛む」という身上について伺っており、「心に掛かるから身に掛かる」という似たようなお言葉を戴いている。

また、正兵衛は次の日には「耳鳴り」で伺っている。ここでは、まず「ついでゝは、心胆さしづ出来ぬ」というお諭しを受けている。「さあ取次一人引いて又一人、めん〳〵一人限り話聞く」というお言葉から察するに、ある人に対する「おさしづ」が終わる前に次の人の伺いを始めたというようなことがあったのだろう。ここでは「おさしづ」の聞き取り方について「ついで」ではいけないと注意を受けている。その上で、正兵衛の身上に関しては、「内々それ〳〵談示、安心一寸残りの処身上尽する」と内々の談じ合いについてのお言葉と、「…身の処これだけ前生いんねんなれど、聞くに聞かれん。心たんのうせ」と前生いんねんに関するお言葉を戴いている。

そして、翌5月14日の午前9時、真柱の眞之亮の立合いのもと、正兵衛は「あしきはらひたすけたまへ天理王命」のおさづけを戴く。

前回に引き続き、明治20年3月27日（陰暦3月3日）午後4時「増野正兵衛身の障り伺」から、おさづけを戴く同年5月14日の「おさしづ」を通してみると、本席の役割であるおさづけを渡すことや取次人も含めてそのお言葉を軽々しくしないことなど、教祖が現身を隠されて後の本席の立場やその意義を明確にするという流れがまずあり、その上で、増野家に関しては正兵衛がおぢばで御用を勤めることや、そのことを内々の者がしっかり承知することなどが諭されていることが分かる。それでは、次に、このような文脈をふまえて正兵衛の身上について考えていきたい。

○「胸痛」「耳鳴り」

まず、『身上さとし』では、「胸痛」の項目で、明治20年5月12日(陰暦4月20日)「増野正兵衛足だるみ胸痛むに付居所の伺」の「おさしづ」が扱われている。その解釈としては、次のように述べられている。

> 心にかかるから身上になる。寝て目がさめれば心にかかる。心にかかるのが神の邪魔になる。すっきり心にかからんようにしたら安心であろう。という意味で、胸痛は心にかけず、神意に添うようにと指示しておられるのであろう。(2)

また、「耳鳴り」の項目で、明治20年5月13日(陰暦4月21日)「増野正兵衛耳鳴るに付伺」の「おさしづ」が扱われており、次のように述べられている。

> おさしづのついでに身上さとしをたずね出てはいけない、ちゃんと一人の話がすんでしまってまた一人というようにせよ。聞くにきかれんことがあっても、前生いんねんとたんのうせよという意味で、耳鳴りは、おさしづをよくきくように、また聞きにくいことを聞いても不足してはならないと指示していられるのであろう。(3)

先に記したように、増野正兵衛がこの頃戴いた「おさしづ」の文脈を鑑みると、『身上さとし』の「胸痛は心にかけず、神意に添うように」というのは、正兵衛にとっては、具体的にはおぢばに移り住むこと（居所）が大きなテーマであったと考えられる。また、それはたんに正兵衛だけの問題ではなく、内々がしっかりと談じ合い、心をそろえるということでもあった。その意味で、「胸痛」には、「内々の者たちでしっかり話し合って心を通わせる」という意味合いも含まれていよう。

ただし、5月12日の「おさしづ」では「胸痛む」と同時に「足だるみ」ともあり、全身に何か倦怠感のようなものもあったのかもしれない。目覚めのときから心に掛かるような先案じの心が、そうした全体的な身の障りとして現れていたとも考えられる。

また、『身上さとし』では「耳鳴りは、おさしづをよくきくように」とあるが、正兵衛に関していえば、取次の立場であったことも見過ごしてはならないだろう。飯降伊蔵は、教祖ご在世の頃から神の言葉を取り次いでいたとはいえ、本席という立場に就いたのは、この時点ではまだ日が浅い。また、本席の「おさしづ」を書き取っていくという体制もいまだ十分ではなかった。こうした点を考えると、「耳鳴り」は「理の話を取り次ぐ態度を養う」という意味合いもあるのではないだろうか。

また、「聞くにきかれんことがあっても、前生いんねんとたんのうせよ」とも解釈されている。人間には前生のことは正確には分からず、生まれる前からの流れを得心することは容易ではない。しかし、ここの「おさしづ」の文脈を考えると、聞きにくいことを聞くためには、まずは本席の言葉の受け取る態度が肝要だと考えられる。そして、正兵衛の身の障りは次の日も続き、神意を伺ったところ、「あしきはらひたすけたまへ天理王命」のさづけが渡された。身上の障りを通して、神の御用をつとめる「ようぼく」へと導かれていく様が読み取れる。おそらく、そうしたプロセスを通して、前生いんねんとたんのうすることも可能になってくるのではないか。

さて、正兵衛は、2日後の明治20年5月16日にも自身の身上の障りから「おさしづ」を伺っている。また、それから4日後の5月20日、さらに6月末には2件、7月には断続的に7件「おさしづ」を伺っている。とくに7月4日の「おさしづ」では「身の処日々身の障りだん〳〵あちらこちらへ変わる」とあり、また7月23日の割書きには「増野正兵衛体内あちらこちら疼くに付伺」と記されていることから、正兵衛には身体のいろいろな箇所に障りがあったことが窺える。「身上さとし」という観点から言えば、「頭痛」や「腹痛」などの器官ごとの分け方では捉えにくい身上の障りが多いことは確認しておきたい。

[註]

(1) 天理教道友社編『教史点描〝おさしづの時代〟をたどる』天理教道友社、2012年、20頁。

(2) 『教理研究身上さとし－おさしづを中心として』天理教道友社、1962年、142頁。

(3) 同書、78頁。